■ネコ娘が騙されて売春させられて中出し絶頂する話

妖怪・ネコ娘。彼女は想いを寄せる妖怪のため、人間界でバイトに励む日々を送っていた。
人間の女性……美少女と言って差し支えない外見であるネコ娘は、
その外見を利用して人々の生活に溶け込み、様々な場で労働することもできるのだ。だが……

「う～ん……ちょっと厳しいわねぇ……」

外見は確かに美麗。しかし背が低く、童顔であることも相まって、　『若すぎる』として年齢が基準に達していないのではと怪しまれ、　面接や選考の時点で落とされることもしばしばであった。
当然ながら戸籍もなく、労働能力の割に高い時給のバイトにはなかなかありつけていなかった。

（もっといっぱい稼いで、美味しいものを食べさせてあげたいのに……）

そこまでして金策に悩むのは、やはり意中の相手のため。
人間界の食べ物はなかなか評判がよく、自分の印象を少しでも良くするために献身しているのだ。

（なにか、一気に稼げるラクな仕事……って、そんなのあるわけないかー）

求人誌を眺め、都合のいい仕事先はないか探すものの、見つかるはずもく。
溜息をつくネコ娘だが……そこに突然、一人の人間が話しかけてきた。

【あの……お姉さん、仕事をお探しですか？】
「えっ？　ええ、まあ……」
（い、いきなり何よ、この人間……）

話しかけてきたのは可愛らしい少年。金銭面に困っている人間に話しかけるあたり、かなり怪しいが……
その毒気のない外見、なにより『お姉さん』と呼ばれたことが少なからずネコ娘の警戒を解き、
つい話を聞いてしまう。
渡された名刺を受け取ると、ネコ娘も知っている事務所名が書かれていた。

【実はボク、こういう者なんですが……】
「？　……これ、あの有名なモデル事務所？」
【はい。で、今、モデルのスカウトをしてまして……お姉さんみたいな、綺麗な人を探してたんです】
「え……キレイ？　アタシが？」
【はい！　その……いきなりですが、是非、ウチでモデルをしてみませんか？　報酬ははずみますよ！】
（あ……アタシが、モデル……？！）

唐突にやってきた美味しい話。
あまりにも都合のいい、しかも今まで若い、小さいと言われてきた外見を高く評価されての話に、
ネコ娘は舞い上がりつつ落ち着こうとするが……

（この名刺……本物っぽいし……でも……）

企画している映画や雑誌……こちらも聞き覚えのあるタイトルが載ってあるものを見せられ、
本物らしさを感じさせる。
更に求める人材に合っているとまで言われれば、すっかり信じ込んでしまうのだった。

【女豹というか、猫科的なイメージの女性を探してたんですが、もうぴったりだと思うんですよねー！
お姉さんならすぐ有名になれますよ！　もしお時間あるなら、すぐ撮影させていただけませんか？】
「えぇ～？　どうしよう、いきなり言われてもぉ～♪」

困りつつ、満更でもないネコ娘。
都合の良すぎる、しかも急を要する話。怪しい点はあるものの、少し悩んだ末……

（ま、多分大丈夫でしょ。何か悪いことしそうなら、懲らしめてやればいいし）
「はい！　よろしくお願いします！」

仮に悪人だとしても、ネコ娘が本気になれば人間など敵ではない。
仲間に、そして想いを寄せる妖怪に更に尽くすため、ネコ娘は少年の話に応じるのだった。

◆

――スタジオだという地下室。モデル撮影という華やかなイメージとは裏腹に、不気味で薄暗い部屋だ。
過去にモデルのストーカーが押し掛けたことがあり、
その対策として人目のつかない場所を選んでいる、とのことだが……
それにしても、有名事務所のスタジオにしては人が全くいないのは不自然だ。

「あの……本当にここ、スタジオなんですか？　それにしては誰も……」
【ああ、みんな忙しいから出払ってるんです。気にせず『撮影』を始めましょう】

三脚を立て、カメラを準備する少年。カメラもそれなりのもので、あまり本格的な感じはしない。
想像とは大きく異なるが、これが現実なのか。そう思っていた時、不意に何かが身体に巻き付いた。

「きゃっ？！　ちょっと、何してんですか？」
【だから撮影ですよぉ。抱擁されるシーンを撮ってるんですから、暴れないで】

巻き付いたのは少年の腕。少女が抱きつかれるシーンを撮りたいようだが、明らかに様子がおかしい。
少年の手付きは普通の撮影では有り得ない動きであり、胴を引き寄せる手はともかく、
もう片方はネコ娘の乳房を衣服の上から触ろうとしていた。
薄々感じていた怪しさが一気に露骨になり、後ろから絡み付く少年を嫌悪感のまま睨み付ける。

「アンタ、やっぱりニセモノね？！　この手を離しなさいっ！」

【いいんですか？　もう撮影は始まってますよ、お金が欲しいんでしょ？】

言って少年が札束を取り出す。その際の下卑た笑顔を見て、ネコ娘は確信する。
やはり少年の言葉は偽りであり、ネコ娘に不埒な行為を働くためにモデル撮影などと称していたのだ。
いや、ある意味でモデルにスカウトしたというのは事実なのだろうが……おそらくポルノ作品でのことだろう。
やり口からして、金銭面で困っている者を偽りのスカウトで誘い込み、
大金を見せて断れない状況を作り、弄ぶ……という腹積もりか。
陰湿な計画に、ネコ娘は本気で抵抗しだす。

「これ以上触らないで！　手を離さないなら……！」
【『小判』はダメかぁ。なら、これはどうかな？】
「っ？！　ふにゃ、ぁ……っっ！」

妖怪としての力を両腕に込めれば、たとえ後ろから羽交い絞めにされていようと
人間を振りほどくなど造作でもない。
まさに今、悪人を引き剥がそうとしたその時、少年が札束とは別の物を取り出し、ネコ娘の眼前に突き付けた。
それは木の枝のような形状であり――匂いを嗅いだ瞬間、少女は気の抜けた声と共に全身の力を失ってしまう。

「これ……っ、まさか……っ」
【そう、マタタビだよ♪　妖怪といっても、こういうとこは普通のネコと変わらないんだね～♪】

猫科動物を官能で狂わせるマタタビ。それを少年は隠し持っていた。
あまりにピンポイントな奥の手。それはつもり、少年は最初からネコ娘の正体を知っていたことを意味する。

「アンタっ、最初から、アタシを狙って……！」
【そうそう。偶然、妖怪と戦ってるとこを見ちゃってね。
その時から考えてたんだ。コレが効くなら簡単にヤレるかなって】

最近多発していた、人間界での妖怪の悪事。
ネコ娘はたびたびそんな妖怪たちを退治するため、本性を露わにしていたのだが……
偶然にもその際の姿を見た少年に、猫の要素を持つ妖怪であることを知られていたらしい。
普段のネコ娘の容姿を気に入っていた少年は、ネコ娘が職を探していることまで調べて張り込み続け……
得意な詐欺ナンパで誘い、更に失敗した時の保険としてマタタビを常備していた、というわけだ。

【賭けだったけど、効いてよかったよ。ここまで効き目強いなら最初から使っとくんだった♪】
「アンタ……今まで見た人間の中でも最低ね！　もういいわ、容赦しな……あっ♥」

少年の外道さに同情や躊躇いの念が消え去る。
すぐさま全力を出して少年を引き剥がそうとするが……
胸の先端を少年の指が捉えた瞬間、思わず甘い音色が喉から漏れた。

【あれ？　もしかしてもう乳首が勃起してる？　可愛い声が出たけど……】
　くりっ♥　こりこりっ♥
「か、勘違いしないでっ！　今のは……あっ♥　さ、触らないでぇっ♥」
（何でっ？　変な声が、勝手に……っ♥　やっぱり、マタタビのせいで……♥）

不意打ちだったため対処できず、マタタビの匂いを思いの外に吸い込んでいた。
それが災いし、ネコ娘自身も経験がないほど肉体が昂ぶっているのだ。
自覚のない内に乳首は硬く尖り、指で弾かれれば肉悦を感じずとも勝手に喉が喘ぎを漏らす。
一体自分の身体はどうなっているのか、どうされてしまうのか。
睨み貌が恐怖で引き攣るのを見て、少年は更に笑みを深める。

【安心してよ、テクには自信あるんだ。あと、カネはちゃんと払うから】
「そういう問題じゃ……んあっ♥　やめ、なさいっ♥　乳首っ……ばっかりぃっ♥」
（ダメよ、こんなのっ！　マタタビ嗅がされたくらいで……こんなヤツの思い通りになんかっ！）

外道の思い通りにされるなど、妖怪として、女としてのプライドが受け入れられるはずもない。
だがやはり身体は力が抜け、人間の女性以下の筋力となっては思うように動けない。
次第に触れられる部分から内側にかけて熱を帯び、じんわりとした疼きを感じ……

【あ、こっちも触って欲しかった？　なら遠慮なく♪】
「なっ？　そういう意味じゃ……」
　すり……くちゅっ♥
「ひにゃぁっ♥」
【お、いい反応。ていうか……もしかして、もう濡れてる？】
「っっ――――！　ち、違うわよ！　アンタなんかに濡れるわけないわっ！」
（ウソでしょ……アソコが、もうこんなに……っ♥）

少年の片手がスカートをめくり、下着越しに淫裂を触れる。
すると乳首の時以上に熱い感覚――はっきりと感じる性感に、また甘ったるい嬌声を出してしまう。
更に同時、淫裂からは湿った音が聞こえた。
マタタビの効果は想像を大きく超えており、若い牝秘部は早くも愛液を滲ませていたのだ。

【へぇ、こんなにマタタビって効くんだ……それとも、元から淫乱なのかな？】
　くりっ♥　くちゅぅっ♥
「なっ！　ふざけないでよ、誰が淫っ♥　あ♥　だ、誰がっ♥　淫乱♥　あ♥」
　ぐちゅんっ♥♥
「んひぁぁんっ♥♥」
【もうこんなに濡れてる誰かさんが、だけど？】
「っっ……だから……これはっ♥♥」
（やだっ♥　触られたら、どんどん熱くなってくるっ♥　これ以上、何かされたら……！）

軽く触れられるだけで、肉体はどんどん牝として反応していく。
これ以上の行為をされれば、どうなってしまうか分からない。
危機感を覚えるネコ娘だが……少年がズボンのチャックを下ろし、
ネコ娘の下着股間部もズラして秘部を露わにしたことで、
いよいよ最悪の予感が現実のものになろうとしていた。

「ちょっ、やだっ、あ♥　何考えてるのよっ♥　やめなさいっ♥」
【大丈夫だって、こんだけ濡れてたら痛くないからさ】
「そういう問題じゃないっ！　もう……いやぁっ！」

男が立ったまま後背位で犯そうとしている……その事態を前にして嫌悪感が官能を上回り、
なんとか少年から離れることに成功する。
勢いよく前進したため前のめりに転び、
きゅっと引き締まった尻肉を見せてしまいながらもすぐに振り向き、本気の殺意と共に威嚇。
だがその際に……

「っ……アンタみたいな悪党、もう許さな……っっ？！♥」
（なっ……こ、これっ、て……っっ♥）

少年の股間……勃起した肉棒と向き合ってしまう。
ちょうど眼前に雄の性そのもの――ネコ娘の乏しい知識と比較して、あまりに雄々しく脈打つ大きな肉塊――
その迫力を突き付けられる形となり、見慣れていないのもあって殺意も忘れて動揺させられる。

「ぁ……ぅ……っ♥」
（やだ……♥　なんてニオイ、してるのよ……っ♥　熱いのが……伝わって……っ♥）
【そんなにチンポの匂いが気に入っちゃった？】
「っっ♥　ち、違うっ♥　いやっ、そんなもの……近付けないでっ♥」

少年に言われ、一瞬とはいえ意識を惹き付けられていたことを自覚させられる。
我に返り、今度こそ少年を退治しようと爪を伸ばすが――
巨根に目を奪われた隙が仇となり、少年に一手早く動かれる。

（こ♥　今度こそこいつをっ♥）
ずぼぉっ♥
「んぐぅぅぅっ♥♥」
（いやぁっ♥♥　こ、こいつのがっ♥♥　口の中にいぃっ♥♥）

少年の動作は、腰を前に突き出すという単純なもの。
ネコ娘の目の前にあった巨根が前進すれば、唇を割って口内へと入り、自然とフェラチオの形になる。
官能が高まったネコ娘は肉棒を避けるという反射すらできず、その匂いと味を口腔内で直に感じてしまう。

「んぶっ♥♥　んぐぐぅっ♥♥」
【ほらっ、これが気に入ったんでしょ？　口の中で味わいなよっ！】
　じゅぶっ♥　じゅぼぉっ♥
「んぶぁっ♥♥　気に入っへらんはっ♥♥　んぐぉっ♥♥　んじゅるぅっ♥♥」
（こいつっ♥♥　こんなとこにまでマタタビっ♥♥　ダメっ♥♥　こんなの咥えたらっ……♥♥
　口の中♥♥　おかしくなるぅぅっ♥♥）
　じゅるっ♥　じゅっぷ♥　じゅれろぉっ♥
「んっぐ♥♥　ぷはっ♥♥　ぁむっ♥♥　んぶぶぶぅっ♥♥」

　なんと少年は自分の肉棒にもマタタビの匂いを擦り込ませていた。
　向き合った際、つい気を取られたのはそのためだったが……その点を思い返す余裕などなく、
　圧倒的な肉感に口内を蹂躙される。
　同時に本能を痺れさせる味と匂いが直接捻じ込まれ、脳にまで甘い電流が響いてくる。
　気付けば自分から巨根を頬張っており、引き抜かれた際には名残惜しく舌を伸ばしてしまっていた。

　じゅぽぉっ♥
「んれろぉっ♥♥　んはっ♥♥　はへぇぇ……っ♥♥」
【ははっ、本当に美味しいの？　舌絡ませてきて……アヘ顔になってるの気付いてる？】
「へあっ？♥♥　あ、アヘ……♥♥　そ、そんなことらいっ♥♥」
（舌♥♥　口の中が♥♥　痺れて……勝手にぃぃ……♥♥）

　未知の単語を使われ、意味不明だが……それが表情を罵っているのだけは分かる。
　反射的に否定するが、巨根が抜けても肉の熱感が後を引き、緩んだ貌が元に戻らない。

【さて……そろそろいいかな？　ほら、カメラ意識して】
「ふあっ？♥　あ……っ♥♥」

　蕩けた表情を見て頃合いと見たか、少年がネコ娘の肩を軽く突き押した。
　完全に発情し、脱力し切った牝猫は全く逆らえず、あっさりと上体を押し倒されて仰向けになる。
　少年が覆い被さり、肉剛を淫裂に押し当てる。
　改めてカメラを……撮影されているということを意識させられ、
　絶望を与えると同時に腰を押し出した。

【大事な場面だからね。しっかり魅せてよ？】
　つぷっ♥
「い……いやっ♥♥　待って♥♥　待ちなさい♥♥
　それだけはっ♥♥　いやぁっ♥♥　撮らないでぇぇっ♥♥」
（こんなヤツに♥♥　こんな♥♥　あぁぁぁぁっ♥♥）
　ずぶぅんっ♥♥
「んにゃぁっ♥♥♥　あ♥♥♥　あぁぁぁ〜〜〜〜〜〜〜〜っっ♥♥♥」